

[第11回日本語文化学会発表要旨]

オーストラリアの大学レベルにおける日本語通信教育課程3年次コース・教材開発

小川京子

(1995.12.9発表)

1. オーストラリアの大学における日本語通信教育課程

オーストラリアの大学の通信教育課程（以下「オフ・キャンパス」と呼ぶ）は、仕事や住居の関係で、通常の通学課程（以下「オン・キャンパス」と呼ぶ）で勉強することができない学生が、授業に出席するかわりにテキストや視聴覚教材、コンピュータなどを用いて自習することにより正規の単位が取れるように設置されたもので、科学、工学、社会学等、多様な科目が履修できる。

モナシュ大学の日本語オフ・キャンパス・コースは、初等、中等、高等教育機関における外国語教育の奨励とそれに伴う大学レベルでのアジア系言語の語学コースの増設という連邦政府の方針に基づいて1992年より開発され<sup>1</sup>、現在1年次（初級）から3年次（中級）まで用意されており、96年度からは4年次のコースの一部もオフ・キャンパスで履修できるようになる。この発表は1993年より1995年にかけて行われた3年次の教材開発についての報告である。

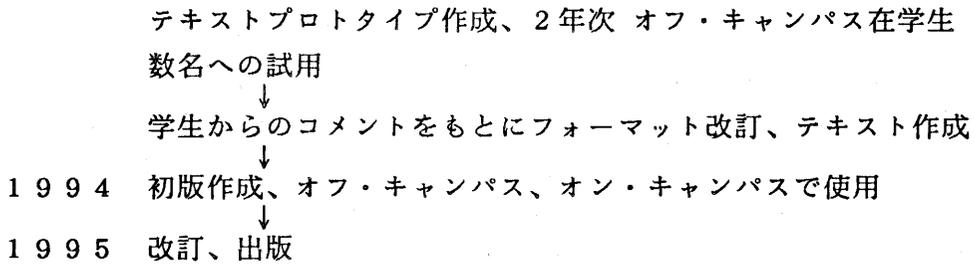
2. コース開発の手順

1、2年次のオフ・キャンパスの開発は既存のオン・キャンパス用のテキスト<sup>2</sup>に基づいて行われたが、3年次課程はそれまでまとまった形としてのテキストが開発されていなかったため、以下の通り、オン・キャンパスも含めた両コースで使用できる教材<sup>3</sup>を開発することとなった。

1993 ニーズ調査

- 1) Off-campus 2年次在学学生に対するインタビュー（主に教材の形式とトピックについて）
- 2) On-campus 3年次担当教師間のディスカッション（主にトピック、活動と教材の構成について）
- 3) 半年間の日本留学より帰国したオナーズ課程<sup>4</sup>の学生にアンケート調査（主にトピックと技能について）

↓  
各種シラバスの設定  
↓



### 3. 開発の基本方針

目標：1、2年次に続き、言語的知識、社会言語的知識、社会文化的知識を総合的に重視し、日本人とのインターアクション<sup>5</sup>ができるようにする。

対象学習者：モナシュ大学を始めとするオーストラリアの大学レベルでの日本語学習者一般。（ただし、オフ・キャンパスの学生は日本語教師が、オン・キャンパスの学生は就職を目的とするものと一般教養として日本語を学ぶものが半々であることを考慮する。）

教材の構成：テキストとテープ、ビデオを基本とし、将来的にコンピュータ使用も考えていく。テキストは各学期1冊、計2分冊とする。また、モナシュ大学オン・キャンパスの授業形態に合わせて、チュートリアル (tutorial) と呼ばれる、新しい語彙・漢字・文型の学習とそれらの運用練習を行う少人数での授業用の部と文法のまとめの講義用の部の2部構成とし、チュートリアルの部は、各学期13週、週4時間の授業スケジュールに合わせて、各分冊13モジュール、1モジュール4課から構成する。また、自習用に各モジュールの最後に復習の課を設ける。

シラバス：

場面：1学期はオーストラリア、2学期は日本での接触場面<sup>6</sup>を中心に扱う。

活動とトピック：1学期はオーストラリアにおける日本人とのネットワーク作りとその維持を主な活動とし、オーストラリア在住の日本人の特徴や日本人社会に関する情報を学び、積極的に日本語学習に取り込んでいくと同時に、学習者の側からも日本人に対して必要な情報を提供できるようにする。2学期は、日本の社会的、文化的側面を中心に学習し、1学期に構築したネットワークを生かして各自で情報収集し、簡単なレポートにまとめるという作業を通して、日本理解を深める。また、3年次は多くの学生にとって最終学年に当たるため、日本語を使う仕事の紹介や入

社面接、ビジネス場面で使われる基本的な日本語等も紹介する。

技能：ビジネス場面で必要とされる技能は1990年文化庁資料<sup>6</sup>を参考にした。

文型：当時唯一の初級文型資料であった1981年文化庁資料<sup>7</sup>の文法標準表の項目のうち、1、2年次までで未習のものを網羅する。その他の文型は1992年日本語教育学会資料<sup>8</sup>を参考に、適宜活動に合わせて学習項目とする。

漢字：1、2年次で未習の教育漢字。但し、課の内容や、実用性を考慮して、一部の常用漢字を教育漢字に優先した。

[注]

1. 井谷由, Y., Mariott, H (1994) 「ディスタンス・エデュケーションによるインターアクションのための日本語プログラム」『世界の日本語教育<日本語教育事情報告編1>』国際交流基金日本語国際センター
2. Neustupny, J. V., Muraoka, H., Spence-Brown, R. (ed.) (1992) Interacting with the Japanese: A Comprehensive Communication Course 1 & 2. Melbourne: Japanese Studies Centre  
Neustupny, J. V., Muraoka, H., Okabe, M (ed.) (1993) Interacting with the Japanese: A Comprehensive Communication Course 3 & 4. Melbourne: Japanese Studies Centre
3. Ogawa, K., Miyazaki, S., Enomoto, S. et.al. (1995) Interacting with the Japanese: A Comprehensive Communication Course 5 & 6. Melbourne: Japanese Studies Centre
4. オーストラリアの大学の人文社会学部(Arts)は一般的に3年制であるが、成績優秀者は希望により4年目の「Honours Course (優等学士課程)」に進むことができる。また、モナシュ大学日本研究学科では前半の半年間、日本で日本語を勉強しながら修士論文の準備をするプログラムが用意されている。
5. Neustupny, J. V. (1995) 『新しい日本語教育のために』 大修館
6. 文化庁日本語教育委嘱研究 (1990) 『一般外国人に対する日本語教育の実態に関する調査研究報告書』
7. 文化庁文化庁国語課 (1982) 『外国人留学生の日本語能力の標準と測定 (試案)に関する調査研究について』
8. 日本語教育学会 (1992) 『日本語教育におけるコースデザイン』 大修館

(オーストラリア モナシュ大学 日本研究科 Lecturer)